

かつて、小林さんは展覧会の関連イベントで公開制作をされた事があった。会場の中央にカンバスを寝かせ、傍に置かれた長机には、手作りの箱に整理された画材、小分けされた紙などの材料が綺麗に並べられていた。さながら“ニンジン油通しして別皿に取り、椎茸は石づきを切り、かさ、軸とも1cm角に切る…”。丁寧に下拵えした食材を一つ一つ火にかけるような所作だ。そして音楽を掛けてスタートする。きっとどんな場所であっても、これらが小林さんの制作の一連の所作となっている事はすぐに想像できた。

カンバスに向かう姿はさらに興味深い。パッパッとテンポ良く進んだかと思えば、用意した材料を手し、カンバスの周りで思慮する場面も。その姿に似た光景を思い起こし、小林さんに将棋を指しているようだと伝え、一頻り話が盛り上がったのを記憶している。兎角小林さんの作品のように、抽象画と呼ばれる様な作品は壁に飾られているだけではわからない。けれど制作を傍で見たことで、別の楽しみ方を知る事ができた。つまり、自分の知る日常体験に、美術鑑賞体験を引き寄せる事で楽しみは倍増したのだ。抽象画を見て分からないと遮断してしまう人、もしかしたら抽象画を見て分かった気にいる専門家でさえも、飾られただけの作品を見ても楽しみ方はわからないのではないか。私たちは自分たちが思っている以上に分かっている事など少ないからだ。以前、小林さんはこんなことを記していた。

立って歩くことができるというのは、何かとても自由で奇跡的なことに思える。わからないという絶対的な重力の上で、ささやかに抗いながらも、その大きさに安心して立って歩く、楽しい散歩。

分からないという前提に立って、自らを解放する。このことによって作家も鑑賞者も本当の作品に向き合えるのではないかと感じた。

ではいま一度小林さんの作品を将棋に例えてみる。盤全体を見渡して、次の一手を慎重に考察し、時に大胆に、一手、また一手と指していく。この度の展覧会に向けて小林さんは新たな駒を獲得したようだ。絵画から化けた立体作品。まさに成駒に例えて良いだろう。小林さんの今後の展開がまた楽しみになった。